明珠

龍泉院
参禅会会報

71

平成31年４月７日

従容録に学ぶ（六三）

第四三則　羅山起滅

〔示　衆〕

衆に示して云く、還丹の一粒は、鉄に点けて金と成す。至理の一言は、凡を転じて聖と成す。若し金と鉄とは無二、凡と聖とも本と同じきを知らば、果然、一点も也た用不著とならん。且道、是れは那る一点ぞ？

〔本　則〕

挙ぐ、羅山、巖頭に問う、「起滅不停ぬ時は如何ん？」（金剛と泥人とが背を摺る。）頭、咄って云わく（星落ち雲散る。）「是れ誰が起滅す！」（識得めれば冤を為さざらん。）

今回の一則は、巖頭全豁（八二八～八八八）とその法嗣である羅山道閑（生没年不詳）という、唐末から五代にかけて中国南部の福建省禅界を風靡した両者の問答であります。

両者について簡単に述べますと、まず巖頭は福建省泉州の出身。出家して北方の長安などで教学を学んだのち、南帰して雪峯・欽山・仰山などの禅哲に歴参し、さいごに湖南の徳山宣鑑に参じて、その法を嗣いだ。徳山といえば、唐末には臨済の〝喝〟と並び称された〝棒〟で有名な禅風の持ち主であり、青原―石頭―天皇―龍潭―徳山とうける青原下第五世にあたる人。『従容録』では、すでに学んだ第一四則と第二二則の立役者でした。大陸最大の洞庭湖畔にある臥龍山（巖頭）を根城にして、大いに宗風を振っています。

一方の羅山は、やはり福建省長谿県の出身。諸方に行脚をし、湖南省の石霜山慶諸のもとで修行したのち、巖頭に参じて悟道をします。閩国の王がその道誉を聞き、福州の羅山に招いて厚遇しました。

『従容録』では、羅山については本則が唯一の主人公たるものですから、とても貴重であります。ちなみ

に、本則は羅山が巌頭に質問した「起滅不停時」が中心になっているのですが、じつは、この問いは羅山がはじめて石霜に参じた時にも質問し、石霜の教えでは契悟に至らず、巌頭に参じてはじめて決着できたのです。

だから羅山にとっては、「起滅不停時」は重大な一大因縁でした。イヤ、羅山だけではなく、これは求道者すべてにとっても切実な問題といえます。

さて、まず万松さんの〔示衆〕をみます。

「道家の霊薬たる九還丹は、一粒を鉄につけるだけで金に変える。同様に至理の一言は凡夫を聖人にすることが可能。だが、金と鉄は元来二つではなく、また凡人も聖人も本来同一だと分かれば、つまりは至理の一言など不用だろう。だが、至理の一言が何だか分かるものは言ってみな。」

こんなところ。九還丹とは道家（仙家）の妙薬。仙家には不思議な霊力や霊薬の話が多いですね。

人間の欲望に対する反面教師かも。とまれ、この〔示衆〕は表面的にはわかりやすい。それは〔本則〕がやさしいからです。〔本則〕は公案の中心。だからその〔本則〕の前後をなす状況や当事者の心境など、枝葉の部分は切り取られるのがふつう。ところが、その枝葉の部分に重要な部分が隠されていることがある。

本則はその典型で、羅山が石霜から「起滅不停時」で決着できなかったことが、実は重要な伏線をなしているのです。

巌頭も羅山も何度か訪れたはずの泉州開元寺の大雄宝殿

本則の語句は平易ですが、羅山の問いに対する巌頭の教えは、言語にならないほどの迫力と手きびしさでした。

「どこに起滅などするものがあるというのか！」と。万松さんのコメントは、〝起〟と〝滅〟とは本来的に並立できないんだ、それを教えた巌頭の迫力で雲は散り去った、と適確です。つまり、「起」と「滅」とを別々に思うのは二念を抱くこと。この二念を離れなければダメなのですね。

私たちは坐禅中に妄念（雑念）が起こる。これを打消す。また起こる。打消す。残念ながら、ふつうは、その連続ではないでしょうか。たしかに、妄念が起こるのはよいはずがない。ですが、いったい、それをまったくなくした状態ならばベストなのでしょうか。

道元さまは、このような問題においては、「心意識の運転を停め」「念想観の測量を止め」なさい、とおっしゃる。

要するに、心のあらゆるはからいを投げ捨てて、ただ坐禅という正身端坐の仏行にすっかりまかせなさい、というのであります。

とはいえ、云うは易く行い難いのが現実。そこで不断の継続であり精進です。起滅などにふりまわされず、ただただ精進いたしましょう。

御老師、眼蔵会で講義

新年会の席上、御老師から「眼蔵会で講義をします」との発表があり、次のように述べられました。

永平寺では一〇〇年以上「眼蔵会」が行われ、そこでは全国の雲水などに『正法眼蔵』を講義しています。今年は六月と一〇月から一一月にかけ、各十日間行われ、私が講義することになりました。当初、辞退して佐々木宏幹先生にもお伺いしましたが、「是非やれ」とのことでお引き受けしました。

梅花講が活動停止

永年、龍泉院の各種行事を裏方として支えてきた「梅花講」が第三六回の成道会を最後に「講」としての活動を停止することになりました。最盛期二五人もいらっしゃいましたが、近年は高齢化で減少する一方でした。今回の成道会では七人が参加、会を盛り上げてくれました。この活動停止について御老師はこう述べられました。

梅花講の方々にはこれまで素晴らしいお唱えをして頂きました。二〇数年、続いてきましたが、今回が最後となります。講員の方々が高齢になり、これ以上「梅花講」という形では続けることが出来なくなりました。誠に残念で寂しい限りです。

梅花講はこれまで三仏忌に参加され、信仰を高め、華やかさを加えてくれました。また、バスに乗って外部の各種の催しにも参加され、「龍泉院の梅花講は素晴らしい」と言われ、龍泉院の名を高めてくれました。

ただ、物事にはけじめがあります。今後も個人的なお唱えはあるとは思いますが、若い人によって再興されるよう期待しています。皆様の健康を念じいたします。

最後の梅花講

御老師が引退を表明

平成三〇年一二月二日、成道会終了後の茶話会で、御老師から「龍泉院の住職を引退する」との発言がありました。理由は「高齢化で体が衰えた」と、言うものです。ただ、時期は未定です。主な内容は次の通りです。

龍泉院の住職になって六一年、いまが潮時と考えました。次の住職に寺を譲り、寺男になります。そのために二棟の建物を建て、一つは東堂（隠居）とし、二つ目は宝蔵にします。檀家の方々には既に伝えてあります。

参禅会、成道会などは今後も続け、一緒にやっていきたいと思いますが、新住職の考えでいくらか変わるかも分かりません。

最近、健康診断を行い、昨年一一月二八日に結果を見ましたが、すべて正常でした。ただ、高齢化で物忘れが進み、目も口も悪くなっています。六一年間、微力を尽くさせて頂き、参禅会も四七年、成道会も三六回行えました。これも皆様のおかげです。人は万物によって活かされます。自分は皆様によってそれ以上、活かされてきました。心からお礼申し上げるとともに、皆様には一層の精進を重ねて欲しいと思います。

献本法要を実施

『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』

平成三〇年九月二三日。午前一〇時半から約一時間、本堂で、『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』献本法要が営まれました。

この法要には参禅会会員三〇名と御老師、禁煙を訴えることで知られる巣鴨高岩寺の住職来馬明規師が参加、とどこおりなく行われました。

殿鐘三会の中、一同が入場。導師の御老師に合わせて一同が三拝、御老師が焼香を行った後、全員で『般若心経』を唱えました。さらに、回向、御老師が法要の趣旨を述べられた後、全員で『参同契・宝鏡三昧』を諷誦、その間に焼香を行いました。

その後、回向、御老師に合わせて全員が三拝、御老師による「参同契・宝鏡三昧について」の法話があり、無事、法要は円成しました。

法要後、大悲殿で茶話会が行われ、一二時半にすべての行事を終えました。

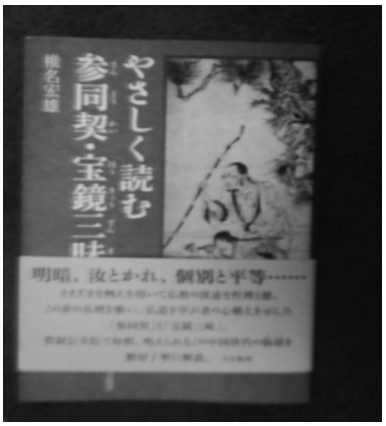
御老師の法話は次の通りです。

『参同契・宝鏡三昧』についての解説書は、参禅会創立四五周年記念事業の一環として出すことになり、なんとなく私が書くことになりました。いろいろあって出版が遅れて申し訳ありません。出版に当たっては五十嵐さんと清水さんに大変な御苦労をおかけしました。

また、小畑節朗さんには素晴らしい「はしがき」を書いて頂きました。心よりお礼申し上げます。

『参同契・宝鏡三昧』の解説書を記念事業にしたのは、「御縁のある方にさし上げよう」と考えたからに他なりません。

出版した大法輪閣から四〇〇部を頂きましたが、それとは別に本を購入、その費用は参禅会と匿名の方に負担して頂きました。ありがとうございます。この本は龍泉院に頂きます。



やさしく読む参同契・宝鏡三昧

『参同契・宝鏡三昧』については、本をお読み頂ければお分かりになると思いますが、禅に関する漢詩です。

『参同契』は唐中期の石頭希遷禅師が書かれ、「回互（えご）がなければ自然も人間も社会も調和を保てない。それを目指そう」という思想です。

『宝鏡三昧』はそれより約一〇〇年後、『参同契』を参照して新しい思想を込め、洞山良价禅師によって書かれました。

「天地・宇宙・大自然は真実をかなえている。すべてが現実に行われており『理論と実践は一致しなければダメ』」ということを論じています。

曹洞宗では『般若心経』、『修証義』が多く唱えられますが、祖師や開山の法要の時は『参同契・宝鏡三昧』を唱えます。

『参同契・宝鏡三昧』の解説書は山ほどあります。おこがましいとは思いましたが「書いて欲しい」との要請がありましたので、執筆しました。読んで得られるところがあれば幸いです。

坐禅普及委員会からの報告

七月の定例参禅会の後、新しい会員八名と坐禅普及委員との懇談が行われました。新しい会員からは坐禅についての継続的な個人指導体制、提唱テキスト、禅に関する推薦図書など、様々な要望が寄せられました。

坐禅普及委員会ではこれらの声を検討し、新入会員に対応することにしました。御提唱のテキスト管理も年番幹事が配慮することにしました。新しい会員の声はなかなか古参の会員には届きにくいので、今後、このような懇談を継続して行うことにいたします。

四五周年記念事業の一環として出版した『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』について、大法輪閣から配布された四〇〇冊を参禅会員に七〇冊、永平寺に一七五冊、總持寺に一五〇冊、マスコミに五冊進呈することになりました。この他、小畑代表が一〇〇冊購入され、有志の方々に進呈されました。

両本山には九月末に宅配便で送付いたしました。特に永平寺では『傘松』一一月号に、『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』が写真入りで紹介され、役寮大衆に配られたことが記されていました。『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』と同封して、奈良康明先生が平成八年の参禅会二五周年記念事業で講演された「私ってなんでしょう」の講演録もお送りしました。

『傘松』の編集後記に、奈良先生が講演で「死」について思いの丈を語られた箇所が、普段先生からお聴きすることがなかったことから、特別に掲載されていました。有難いことです。

坐禅体験会は三回行われました。一〇月二一日に柏市国際交流協会主催の外国人坐禅体験会が行われ、外国人と日本人スタッフ合わせて一六名が来山しました。

外国人坐禅体験会

一二時四五分から小畑代表の挨拶と坐禅全般の説明、続いて五十嵐さんから調身・調息・調心の説明があり、その後、坐禅堂に移動して、坐禅指導係一名の両側に外国人一名と日本人スタッフ一名を配置し、坐禅をしながらの指導方法をとりました。坐禅後は大悲殿に移動して茶話会となりました。

茶話会では外国人から「坐禅堂では何故靴下をぬがなければならないのか」とか、「坐禅堂では線香がないほうがよいのではないか」など、普段我々が思いつかない質問が出

外国人坐禅体験会

て、答えに窮することもありました。

一〇月二七日には開智国際大学学園祭で坐禅体験会を開催いたしました。午前八時に大学に集合し、会場となる茶室で坐禅会場の設営を行いました。

昨年は会場が教室なのでビニールタイルの上に絨毯を敷いて行いましたが、坐禅会場としては余りふさわしところではありませんでした。今年は茶室なので畳に坐ることができ、しかも、床の間に達磨さんの掛軸を掛けるなど、坐禅には最適な会場を設営することができました。

古賀ゼミの坐禅体験会

一一月二九日には開智国際大学教養学部古賀ゼミの先生と学生計六名が来山されました。午後三時半から小畑代表の挨拶と坐禅全般の説明の後、坐禅堂に移動して、六人の坐禅指導係が一人ずつ指導しました。二〇分間の坐禅二炷と五分間の経行を行った後、大悲殿に移動して御老師の法話を拝聴しました。

大悲殿を椅子席に

最近は畳に坐ることができない高齢者が多くなってきたことから、龍泉院では大悲殿に新しく机と椅子を設置することになりました。御老師の指示で、参禅会の提唱の時でも法要の後でも、対応できるような机と椅子を、カタログから選びました。検討の結果、机を一八脚、椅子を六〇個、さらに講師用の机を一脚購入することになりました。

椅子席になった大悲殿

大悲殿に設置される机と椅子の配置について検討、参禅会の時は教室スタイルで、机を横三列・縦五列に配置することになりました。

普段は机を横に三つ繋げたものを二列並べるスタイルと、八個をロの字型スタイルに並べた二種類で配置することになりました。なお、成道会の時は大きくコの字型スタイルで配置します。

一夜接心を一日に

毎年六月に行われる一夜接心の参加者が年々減少していることから、一夜接心に替わる新しい行事についての検討が行われました。この結果、二日に渡って行われていた一夜接心は、宿泊をなくし、一日のみで行うことになりました。

午前に坐禅二炷と禅講、中食を挟んで午後には坐禅二炷と禅講と茶話会を行う方向で検討中です。なお、午前の部のみ、午後の部のみの参加でもよいことになりました。

荒除け観音

取手市　近江　礼子

毎年九月一日、大悲殿の百観音堂前で、千葉県観音太鼓保存会により、荒除け観音が開かれている。小畑代表の御紹介で見学出来たので、報告したい。

一　風祭り

かつて、例年、二百十日に当たる九月一日頃、台風による農作物の害を防ぐため全国的に風祭りが行なわれた。風祭りは、風日待、風祈祷、風防ぎ、荒れ日の神事（かみごと）などと呼ばれ、人々が寺社や寮に参籠して風除けを祈祷したり、念仏を唱えたりする。

富山県富山市八尾町の「おわら風の盆」は良く知られているが、柏市泉では、古くから「荒除け観音」と、呼んでいたという。

二　千葉県観音太鼓保存会と龍泉院

荒除け観音は、龍泉院の行事ではなく、保存会の行事。柳戸の飯田喜久雄氏が会長を務め、六十代から八十代の男性六名、女性一〇名の計一六名で組織され、毎月第三土曜日午後七時から、観音経読誦の練習をしている。

百観音堂には、龍泉院二五世鉄眼和尚が周辺二四カ村に呼び掛けて、天保一〇年（一八三九年）に建立した西国・秩父・坂東観音霊場の観音石像一〇〇体が祀られている。

それ以降、周辺村々に普門品講が組織されたとされる。さらに、山門左前には石塔「普門品拾万巻供養塔」「嘉永三庚戌年十月廿一日　当山二拾六世隠山顕之叟」が建ち、台石正面には「講中」、その左右には手賀沼周辺の三六カ村の名が刻まれている。

保存会の前身は千葉県沼南町観音太鼓保存会で、平成一七年に沼南町の名を削り、現在の名称となった。昭和四〇年頃までは旧沼南町の各集落に普門品講があったが、講員が少なくなり、沼南町全体で一つの講となり、昭和六〇年頃に観音太鼓保存会と改称した。

三　荒除け観音

午前九時、男性五名と女性八名が大悲殿に集合。百観音堂の扉を全開し、前に横九枚、左後ろに四枚の座布団を敷き、前列中央前と右端には大太鼓二台、その左右両脇と後ろには小太鼓（ツケ太鼓）一〇台を置いた。前の祭壇には、蝋燭・香炉・花・御神酒、御老師が版木から摺った御札二〇枚が載っていた。

御札は上部に「西国秩父坂東」、右に「下総国相馬郡泉邑天徳山龍泉禅寺」、左に「板木施主同国同郡若白毛邑講中」とあり、一〇〇体の観音像が摺られている。

午前一〇時、「南無観世音菩薩」とある白衣を着て、輪袈裟を着け、予行練習が始まった。大太鼓の撥は二本、小太鼓は撥一本である。

午前一一時半過ぎ、緊張感漂う厳粛な中で、次の順で荒除け観音が始まった。経本は『妙法蓮華経観世音菩薩普門品』。

・懺悔文
・開経偈
・観音経「妙法蓮華経」の第二五「観世音菩薩普門品」の独立したもので、「普門品」ともいう。
・祈願文
・般若心経
・本尊真言　百観音堂の本尊聖観音の真言
・回向文（普回向）「願以此功徳　普…」

午前一一時五〇分、会長の「ありがとうございました」の挨拶で、荒除け観音は滞りなく済んだ。時間は一二、三分であった。

荒除け観音

開智国際大学で坐禅体験会

昨秋に続き、平成三〇年一〇月二七日、柏市の開智国際大学の学園祭「柏学祭」に東葛坐禅クラブとして参加、一〇時から一六時まで出張坐禅体験会を開催しました。

一〇時から坐禅体験会が始まり、午後四時までに二二名（男性八名、女性一一名、子供三名、そのうち大学の先生四名）の参加があり、中には昨年に続いて二回目の方もいらっしゃいました。

坐禅は一五分間でしたが、足がしびれたり痛くなって一〇分でやめる人もいれば、一五分では短すぎるという人もいました。

特筆すべきは、母親と一緒に坐った小さなお子さんの非常に素晴らしい坐相を見ることができたことです。

その後ろ姿を見て、日本人の将来も捨てたものではないと思いました。

参加者の感想としては、「普段忙しいので静かに呼吸に集中する時間を持てて良かった」、「心が落ち着きすっきりした」、「足は痛かったがよい経験をした」との各種の声に接しました。

文化人類学者で、インド文化研究がご専門の古賀万由里先生も昨年に続き参加されました。

古賀先生は、禅に興味を持っておられ、当日、先生から、「是非龍泉院禅堂での坐禅と椎名老師の法話も聞きたい」との要望があり、一一月二九日古賀ゼミ生五名と共に訪問され、坐禅体験会が実現しました。

その他の先生の中でも龍泉院での坐禅体験会に興味を示された方もおられ、今後、学生を含め、禅に触れて頂く機会を設けるようフォローしていきたいと思います。

古賀ゼミとの茶話会

古賀ゼミ生が上山

平成三〇年一一月二九日午後三時半、開智国際大学の古賀万由里先生とゼミ生五人が上山、坐禅を組みました。一〇月二七日に開智国際大学で開かれた学園祭で清水さんが古賀先生に話され、それが奏功したものです。

小畑代表の説明後、雲堂に入り、坐禅二〇分、経行五分、坐禅二〇分を行い、その後大悲殿に戻り、御老師の講話の後、茶話会を行いました。当日は参禅会員八人が参加、一対一という豪華な坐禅指導となりました。坐禅では足を組みにくい人もいましたが、最後まで頑張りました。

茶話会で学生から「足が痛かったが、終わった後気持ちがよくなった」、「幸せになるにはいくつかの方法があり、坐禅もそのひとつ。勉強したい」との発言がありました。

古賀先生の感想

二〇一八年一一月二九日（木）、「ゼミナールⅢ（文化人類学／古賀万由里講師）」の授業の一環として、柏市泉にある曹洞宗天徳山龍泉院の禅堂で坐禅の体験を行いました。

当日は参禅会の方々にご指導頂き、坐禅

（二〇分）、経行（五分）、坐禅（二〇分）を行った後、住職・椎名老師の法話を聴きました。自我をコントロールしなければ幸せになれないので、呼吸と姿勢を整え、心を散乱させないことによって、自我をコントロールすると伺いました。慣れない姿勢に足の痛みが生じた人もいましたが、禅文化に触れ、普段とは異なった平穏さを感じる貴重なひとときとなりました。（開智国際大学のホームページより転載）

外国人坐禅体験会に同席して

我孫子市　小畑　二郎

一〇月二一日、柏市国際交流協会の有志による坐禅体験会に同席させて頂きました。参加者の皆様は、指導する必要もないぐらい熱心に坐禅に精進しておられました。私にとって外国人に対する坐禅指導は二度目でしたが、今回も静かな時間を共に過ごす悦びを味わうことができました。

その中でもとりわけ印象深かったのは、ドイツ人の青年による茶話会での発言でした。

この青年は、禅宗の僧侶になったドイツ人のネルケル氏と同様に、「自分の生きる意味を求めて坐禅を体験してみようと思った」と語ってくれました。このような青年の悩みに対して、「タメ坐禅ではだめだ」と頭から退けるのではなく、どのように答えてあげたらよいのかと後で思案しました。

その時は、小畑代表に勧められ、英文のSOTO ZENとHeart of Zenを差し上げたところ、青年はたいそう喜んでいました。

今後は、各国共通のこのような青年の悩みに対して、何らかの助言のできるようにしたいものだと、反省しました。

雲堂で坐禅する参加者

比較的新しい会員と懇談

平成三〇年七月二三日の酷暑の日、約一時間、比較的新しく参禅を始めた八人の方から入会の動機、要望などをお聞きしました。結果は次の通りです。

［各人の話］

・寺宝展を見て入会しました。このペースで続けていきたい。

・J・COMを見て入会しました。不満もなく楽しい。ただ、坐禅が自己流になっているか心配。指導者に聞いてみたい。

・作務に参加出来ないのが心苦しい。

・インターネットを見て入会しました。定年が間近。定例会しか出られず積極的な参加はできない。坐禅は終わった後、さわやか。一夜接心は半日参加したが、よかった。

・坐禅に漠然とした興味をもっていた。息子も興味を持っていたのを知り、インターネットで調べ、入会しました。

・世の中は物質的なことに重点を置きすぎます。目に見えないものが分からないと人を傷つけてしまいます。坐禅をして「よい面と悪い面の両方を認めないと、ネガティブになってしまう」と分かりました。

・前から坐禅をしたいと思っていました。いろいろやっているので行事などには参加出来にくいのですが、決めた日は坐禅をしたいと思っています。
・先月初めて参加しました。来年六〇歳になるが、芯がぶれていると感じて坐禅を始めました。

【要望】

・坐禅の個人指導をして欲しい。
・仏教の入門書など教えて欲しい。
・坐禅の時、足が痛くならない秘訣は？
・御老師のテキストを前回、現在、次回の三部、配って欲しい。
・困ったとき、だれと話したらよいか教えて欲しい。
・御老師との話し合いの場があったらよい。
・自由参禅の時も警策をして欲しい。
・行事の一覧表を新人にも配って欲しい。

◇　◇

「楽しい」という話が多かった。不満はあまりなかった。来なくなった人を対象にこのような会を開くのもよいかもしれません。なお、「コミュニケーションの場を設けて欲しい」とほぼ全員が希望しました。

第三六回成道会

焚き火の跡を残し、きれいに掃き整えられた門前。つげの緑とどうだんつつじの赤のコントラストの境内。薄曇りで風のない平成三〇年一二月二日、第三六回成道会が行われました。

報恩の坐禅二炷を組んだ後、梅花講の御詠歌に迎えられ、威儀を正した法要が行われました。

成道会の後、次のような問答が行われました。

刑部：非思量の「自己本来の面目」を黙々と行うには。

御老師：ただ坐る。その中に自己は備わっています。

清水：お釈迦様が一生掛かって得られた第一の心理とは。

御老師：お釈迦様は五〇年、説法された。その説法は「無言」と同様です。言葉に左右されてはならない。自分で自分の心を律することです。

五十嵐：本来無一物とは。

御老師：なにものにもとらわれないことです。しかし、人は様々なものにとらわれがちなので、それを切ることです。

久光：悟らずして托鉢に出て行くのはどうか。

御老師：菩薩も悟ってはいらっしゃらない。私どもも（托鉢に）出るのは一向にさしつかえない。

原：「縁なき衆生は度し難し」というが、別の正しいことはある。それに向かっていってもよいのでは。

御老師：私も師匠から何度も言われた。度し難いからこそ「自未得度先度他」を実践すべきでしょう。

杉浦：三四年、参禅会に来ているが、忸怩たる思いがする。喝を頂きたい。

御老師：（大声で）カツー。

中嶌：論に「さらさらと　ださらさらと水は流れる」とある。

御老師：わたしもあやかりたい。

小畑節朗：来年は干支が変わる。どうなるのでしょうか。

御老師：来年は来年の風が吹く。

牧野：タクワンは音をたてて食べてはいけないというが、音をたててもよいとの説もある。

御老師：その時、その時の雰囲気を壊さないよう如法に務めたらよいでしょう。

参加者は参禅会員二五名、梅花講員七名。終了後、御老師から「公の場での梅花講による御詠歌はこれで終りになります」とのお話がありました。さわやかな歌声と鈴の音が最後とは、本当に寂しい思いで、感謝の気持ちをのせて拍手しました。

◇　◇

法要後、大悲殿に場所を移し、松井、小山、佐藤、小畑（節朗）さんが典座を務められ、次のような心のこもった料理が出されました。

①すまし汁（なめこ、ホウレン草、麩、うどん②炊き込みご飯（にんじん、椎茸、ゴボウ、しめじ）③菊花かぶ（かぶ、柚子）④大学芋（サツマイモ、ごま）⑤煮染め（こんにゃく、にんじん、椎茸、ゴボウ、インゲン）⑥黒豆⑦柿なます（大根、にんじん、干し柿）⑧えご酢味噌（えご、味噌、酢）⑨香の物（たくあん）⑩ごま合え（ホウレン草、ごま）

食後の茶話会で感想が披露されました。

最後に御老師が「住職を引退する」との決意を述べられました（三頁に詳報）。いつかあることとは思いながらも、驚きとともに信じたくない気持ちで一杯になりました。

歳末助け合い

平成三〇年一二月一六日、恒例の歳末助け合いを柏駅東のコンコースで、一時から二時間行いました。参加者は御老師を含め一三人。昨年同様、寒さの厳しい午後でした。小さな子供を連れたご婦人が、一三人全員に寄付してくれました。千円を寄付してくれた方も結構おられました。集まった志納金は五万四一三六円。昨年度より一万二六〇九円多く集まりました。この志納金は全て朝日新聞厚生文化事業団を通じ、困った方々にお送りしました。

歳末助け合い

感謝の気持ち伝える

我孫子市　吉澤　誠

歳末助け合い托鉢に初めて参加させて頂きました。当日の午前中は晴れて、温かい日差しも感じられましたが、托鉢を行う午後には曇り空となり、気温も下がってきたように感じました。

集合場所の長全寺へ到着後、募金箱を頂き、首に下げ、歳末助け合い托鉢の幟旗を受け取りました。街頭での募金活動は初めて。少々緊張して身が引き締まります。

出発前に般若心経をお唱えしましたが、まだ暗記しておらず申し訳なく思いました。長全寺を出発して、御老師の後に続き、托鉢場所の柏駅東口に到着。いよいよ開始です。

街ゆく方々に対し、歳末助け合いの協力を呼び掛けますが、予想通り、人々は通りすぎていくのみ。少しですが雨も降り始め、寒さをさらに厳しく感じましたが、御老師が傍におられ、心強いものがありました。

協力を呼びかける声を大きくし、諦めずに繰り返し頭を下げ続けます。するとジャージを着た女子中学生三名ほどが、私の二、三メートル先に立ち止りました。そのうちの一名が

私に近づき、寄付をした後、すぐに離れていきました。短い時間だったので、しっかりと感謝の言葉が伝えられなかったのが心残りです。

その後、制服姿の男子中学生と思われる方二名からも寄付を頂きましたが、このときはしっかりと感謝の言葉を伝えることができました。

おそらく、お小遣いから出してくれた貴重なお金だと思います。托鉢で集まったお金が有効に活用されることを祈っております。

午後三時、托鉢は終了。その後、「うどん市」で温かいうどんを頂きました。冷えた体に身に染みて、温かい食べ物のありがたみも感じることができました。

寒い中の二時間ではありましたが、終えてみれば、思っていたほど長い時間ではなかったように思います。よい経験をさせていただいたことに感謝いたします。

キャッシュレス化に対応を

柏市　霜崎　美穂

歳末の助け合い托鉢に参加しました。

「浄財」と書かれた募金箱にお金を入れてくれる人を見ながら、最近、現金を使うことがメッキリ減ったなと思いました。電子マネーやクレジットカードでの支払いが主で、現金を使うのは自販機くらいになりました。

キャッシュレス化したお金は画面に表示されるただの数字です。皆この数字に一喜一憂させられて生きていると思うと、なんともいえない気持ちにさせられます。

キャッシュレス化に合わせて、托鉢の形も将来的には変わっていかなくてはいけなくなるのかもしれません。

托鉢中の参禅会員

新年会、和気藹々に

恒例の新年会が二月三日、午後二時から三時間、柏の「うどん市」で開かれました。参加者は一四名。和気藹々のうちに、あっという間に時が過ぎました。また、アミダ籤では小山齋さんが金賞を射止め、大きな数珠を御老師から贈られました。

開会に当たり、小畑代表は「参禅会も四八年になり、最初に開いた時に生まれた子供が五〇歳近くになりました。新住職が来られるとのことですが、坐禅に熱心な方と聞いています。精進をともにしたいと思います」と歓迎の意を述べられました。

また、乾杯の音頭を取った杉浦さんは「御老師はピカピカしておられ、まだ、二〇年や三〇年は大丈夫。是非、引っ張って頂きたい」とボルテージを上げました。

席上、御老師はこう述べられました。

「参禅会は四八年間続きましたが、一番勉強させて頂いたのは私でした。皆様があってこそ、私があると思っています。最終段階に入りましたが、今年一杯、何が出来るかを考え、努力していきたいと思います。サポートをお願いします。

新住職は四〇歳代で、かって自衛隊におられ、丹後宮津の修行道場『智源寺』で五年ほど修行された方です。三月三一日の護持会で紹介、行事に参加して貰います」。

涅槃会、涅槃図掲げ開催

余寒の厳しい二月一五日、本堂内の右手に大きな涅槃図を掲げ、涅槃会が行われました。

定刻通り、維那と先導を小畑代表、侍者を松井、持香を山桐、副堂を五十嵐の各氏が務められました。参加者は御老師、参禅会員一二名、一般の方二名でした。

梅花講の参加がなく、少し寂しい感じでしたが、背筋のすっきり伸びている御老師が粛々と取り行いました。法話は次の通りです。

梅花講の方々が高齢により不参加になったのは残念です。住職歴六一年となり、平成の区切りとともに、住職を引退することになりましたが、命の限り坐禅は行います。

龍泉院は七六五年前の鎌倉時代に創建されました。一四代目の住職の時、領主の本多氏から寄付を受け、涅槃図を購入したようです。この涅槃図は柏市では一番古く大きいといわれています。二月一日から一五日まで涅槃図を掛けておきます。お釈迦様の周囲の方々は嘆き悲しんでいますが、お釈迦様は穏やかなお顔で横たわっておられます。

心の目で観照し、その中に秘められている「自未得度先度他」の心を感じて欲しいものです。

一炷の坐禅後、茶話会が大黒様の心遣いで、暖かく整えられた本堂奥の客間で行われました。

一般参加のお二人は映画監督の安部さんと女優の西塔さん。「柏　涅槃会　二月一五日」の三文字でネット検索したところ、龍泉院の紹介があり、新柏付近から来られたそうです。「見えない出来事が何度かあり、仏教に関心を持たれた」と述べられました。

涅槃図

想う事

本舞台は常に将来に在り

我孫子市　清水　秀男

「人生の本舞台は常に将来に在り」。これは、尾崎行雄氏（一八五八～一九五四年）の言葉です。尾崎氏は一八九〇年の第一回総選挙から連続当選二五回、衆議院議員として明治・大正・昭和の三代にわたり六〇有余年、護憲・普選・軍縮運動に活躍。常に中立・公正の立場から立憲政治の擁護に努め、「憲政の神」「議会政治の父」と呼ばれました。

二〇一四年に復刻された尾崎行雄著『人生の本舞台』の中に次のような言葉があります。そこから、尾崎氏がそこに込めた思いを味わってみたいと思います。

「知識経験は金銀財宝よりも貴い。しかるに世間には、六、七〇歳以後はこの貴重物を利用せずに隠退する人がある。…金銀財宝は、他人に譲ることが出来るが、知識経験は、それが出来ない。…有形の資産は、老年に及んで、喪失することもあるが、無形の財産たる知識経験は、歳と共に増すばかりで、死ぬ前

が、最も豊富な時である。故に最後まで、利用の道を考えねばならぬ。この信念を推究すれば『人生の本舞台は常に将来に在り』ということになる。言い換えれば『昨日までは、人生の序幕で、今日以後がその本舞台だ』という事になる」

以上の様な哲学と信念が生まれたのは、尾崎氏が七四歳の時。盟友の犬養毅が五・一五事件で暗殺され、憲政の樹立への努力も実らず、療養中の夫人も亡くし、かつ自身も病床に伏し、挫折と失意に打ちひしがれていたある夜、天啓の如く閃いたという。

この覚りと言うべきものが人生の転機となり、希望の光を見出し、再び民主政治の確立と世界連邦の建設に向けて九七歳まで精力を傾け、逞しく政治家人生を全うしたのです。上述の尾崎氏の「人生の本舞台は常に将来に在り」の玉文を私なりに玩味します。

「人はいくつになっても、人生は現在以後が本舞台だと思って生きること、過去はそのための準備行為に過ぎない。過去が逆境であろうとも、それは今後、成功するための貴重な試練であり糧と捉え、未来に生かす。一方、過去が順境であろうとも慢心することなく、それを次の目標に向けての準備と捉えることが肝要。そして、人間は年齢と共に肉体的には衰えるが、無形の財産である知識や経験は年々豊かになり、死ぬまで成長し続けていく。この宝を生かし、各自社会に貢献していく必要がある。生涯現役・臨終定年の心構えで生き抜くことが肝心」

ということになるでしょうか。

「過去はみな　未来のわざの　備えぞと
知れば貴し　悔いも悩みも」（尾崎行雄）

◇　◇

私は今年七六歳を迎え、「新老人」二年目を迎えます。勇気と希望を与える尾崎哲学をよくかみしめ、及ばずながらこれまでの人生で培った知恵や経験を活かし、少しでも社会にお返しをし、生きがいを持って充実した生涯を生き抜くことを目指したいとの思いを新たにしています。

最後に尾崎氏が昭和一一年、今の国会議事堂が完成した時に詠んだ和歌を紹介します。

「美事なる　此の議事堂に　ふさわしき
議員を得るは　何時の代ならん」

昨今の国会の有様を見ていると、八二年経ても議事堂に〝ふさわしき議員はいずこ？〟の感はぬぐえません。

偶感

流山市　添田　昌弘

椎名老師のご著書『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』を拝読した。おおよそのことは分かった積りであるが、おおよそではなくなるように読み返えさなければと思う。

『参同契』、『宝鏡三昧』は今までは、普段詠まない『お経』だと思っていた。『般若心経』や『観音経』、『修証義』、『普勧坐禅儀』等は解説本が本屋に行けば沢山並んでいるが、この二つの『お経』の解説書は見つけることが出来なかった。

教本を手にしたとき、私に仏教の基礎知識が乏しいことと、漢文に慣れていないことで、理解出来なかった。『お経』は解説書を見なければ分からないというのは悲しい。

私の高校時代に漢文の時間はあった。国立大学では、当時漢文の問題が入学試験に出題されない傾向になりつつあった。昔の中国語はこれからの時代、必要ないと思い、三年生になって漢文の授業を選択しなかった。

最近の高校では漢文の授業があるのだろうか。四〇歳半ば過ぎまで仏教の『お経』の本を見ることはなかった。坐禅を始めて『お経』

の本を開いてみて、漢字ばかりなのにびっくりした。

キリスト教では、権威づけのため昔は民衆に分からないように『新約聖書』はラテン語で書かれ、お祈りもラテン語でしていた。

一五一七年にドイツの神学教授のマルチン・ルターがドイツ語訳を完成させ、民衆が直接キリストの教えに接するようになり、各国の言葉に訳されるようになったという。

日本でも聖書は明治時代に文語体で訳されており、現在は口語体に訳し直されている。

仏教は今でも、「知らしむべからず、依らしむべし」と、分からないようにしているのだろうか。

『般若心経』は七世紀に玄奘三蔵がサンスクリット語から漢訳した。『法華経』はもっと古く、鳩摩羅什が五世紀に漢訳したものである。昔の中国語である。

それを二一世紀の日本で読んでいる。何故なのか。日本の仏教にはいろいろな宗派がある。そして、宗派により、詠む『お経』が異なる。葬儀や法事で、お経を聞いても分からない。私は分からないものは有難いと思わない。

仏教学者の中村元教授は「日本には分からないことは有難いことだという変な思想があります。これからは一般の人に分かり易いものにしていかなければならない」と主張している。

友松圓諦先生は著書『仏教の未来をひらく』の中で、「和訳の経典を使用するほかに、仏教の救われる道はない」という。

ダライラマが日本に来た時「二一世紀の仏教徒になれ」と言ったのは、先ず経典を日本語にするところから始まるのではないだろうか。

西谷啓治教授も「現代に宗教がない。宗教に現代がない」という。

仏教も現代に生きているのであり、時代と共に変化していかなければならないのではないか。

八十歳を過ぎ、ボケかけている老人のつぶやきである。お許しあれ。

自治会館で定例「椅子坐禅会」

流山市　中嶌　宏誠

私が住む自治会は昭和四〇年にできた、約六〇〇世帯の東急団地です。昨年一一月に新たに会館が完成したので、会館を活用し、地域に貢献したいと、こころ静かで落ちついた安らかな自己に出会う坐禅「森の坐禅会」を行うことにしました。若者やシニアの方を考慮し「椅子坐禅」を定例で、毎月二回、所要時間は作法確認から二炷、経行・抽解まで四〇分としました。

警策は龍泉院でスケッチし、素材を求め鉋をかけニスを塗り（自作）。

〝魅力ある坐禅会を目指し〟団地外の方々にも声をかけ実施しています。

若者は**往く道「多岐無限」チャレンジ！**

シニアwは**往く道「最終章」照顧脚下！**

合掌

森の坐禅会

沼南雑記

【定例参禅会・年間行事】
（　）内は座談の司会者

平成三〇年

●九月二三日　三二名（佐藤　修平氏）
●一〇月二一日　三三名（清水　秀男氏）
●一一月五日　三七名（杉浦　上太郎氏）
●一二月二三日　一九名（添田　昌弘氏）
●一二月二日　二五名
成道会
幹事　小畑　節朗氏
小山　齋氏
佐藤　修平氏
●一二月一七日　一三名
歳末助け合い

平成三一年

●一月二七日　三〇名（岡本　匡房氏）
●二月一一日　一四名
新年会
●二月一五日　一五名
涅槃会
●二月二四日　三六名（山本　三郎氏）

【自由参禅】
九月　二日（九名）、八日（八名）
一〇月　七日（九名）、一三日（九名）
一一月　四日（一一名）、一〇日（九名）
一二月　八日（八名）
一月　六日（九名）、一二日（一一名）
二月　三日（五名）、九日（一〇名）

【奉仕作務】
九月　七日、八日
一一日
一〇月　五日、一三日
一九日
一一月　二日、一〇日
二三日
一二月　七日、八日
一四日
一月一二日、一八日
二月　一日、九日
一六日

【坐禅普及委員会】
九月二三日（一〇名）
一〇月二八日（　八名）
一一月二五日（一一名）
一月二七日（一〇名）
二月二四日（一一名）

〔編集後記〕

▼正月に凧揚げをして、左膝を痛めました。体の重さに耐えられなかったようです。不自由な事、この上もありませんでした。（近江）

▼涅槃会、御老師は「命の限り坐禅を続ける」と仰せられました。御老師の警策が私を励まして頂いていると感じておりました。人によって受け取り方は異なるでしょうが、まだまだ続くのは嬉しいことです。

警策の音それぞれや年惜しむ　（坂牧）

▼昨年暮れに大学時代の、一月に小学校時代の友人を失いました。最近、大学のクラス会で九人の仲間が亡くなったことを知りました。喜寿を迎え、残る人生もあとわずか。「一瞬が永遠に通じる」と過ごしたいと思っています。（救済）

●発　行／天徳山龍泉院　千葉県柏市泉81　☎04(7191)1609
●印　刷／東港出版印刷株式会社　目黒区中目黒1―8―8　☎03(5724)7302

龍泉院参禅会簡介

【参　禅】

一、**定例参禅会**
・**日　時**　毎月第四日曜九時（初参加者は八時半）来山、正午解散
・**坐　禅**　口宣、坐禅、経行、坐禅の順
（坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分）
・**提　唱**　木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱
・**座　談**　自己紹介・喫茶・座談

一、**自由参禅**
・**日　時**　毎月第一日曜と第二土曜日
・**坐　禅**　九時から一〇時半時まで（入退堂自由）
※会費無料、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】

一、**一日接心**　本年は六月二日、四炷の坐禅と提唱等
一、**成道会**　本年は一二月八日、坐禅二炷・法要・問答・法話等
一、**他の行事**　涅槃会（二月一五日）、花祭り（四月八日）、施食会（八月一六日）手伝い、歳末煤払い（一二月例会後）
一、**作　務**　毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

【会報誌】

一、『**明珠**』（四月八日と一〇月五日発行）
一、『**口宣**』（年一回）
〔**ウェブサイト**　http://www.ryusenin.org/〕『明珠』『口宣』のバックナンバーがご覧になれます